

# 宣教師辞任の前と後

カレン J. シャフナー

## はじめに

私は1984年に米国南部バプテスト連盟 (Southern Baptist Convention, 以下 SBC と略称する) 外国伝道局 (Foreign Mission Board) の宣教師として任命された。派遣先は日本、仕事は西南学院大学の教員であった。8週間のオリエンテーションを終えて、6月21日に東京に着き、7月4日から日本語の勉強を始めた。1986年の夏に福岡に移り、1987年4月から西南学院大学の文学部国際文化学科の教員としてドイツ語やキリスト教学を教え始めた。ここに至る経緯を少々述べさせていただきたい。

私はテキサス州のフォートワース市にあるサウスウェスタン・バプテスト神学校の神学修士課程 (M.Div.) を1982年の12月に終えた。昼間に留学生の家庭教師、夜間に難民対象実用英語の教師のアルバイトをして、卒業後も聴講生としてとどまり、いくつかの授業を受けながら、次のステップを考えようとした。その頃に、外国伝道局の人事担当者に興味があったので、相談しに行った。面接の中で、担当者は私の学歴と経歴を見て、どこで、どういう働きに興味があるかについて聞き、大学生のための働きをするつもりであれば、2年間大学宗教主事 (Baptist Student Union Minister) としての経験を積んでから、また面接に来るように言った。ただし以前にジャーニーマン (Journeyman, 2年の短期間の宣教師) として過ごしたガーナでは独身の女性は認めないので、別の地域を考える必要があるとも言われた。

大学を卒業して1974年から1976年までジャーニーマンとしてガーナに行き、初めて外国での生活を送った。生まれ故郷を離れ、聖書通信講座と宣教師の子どもたちの教育支援を担当しながら、自分の文化・信仰を考えるよい機会となった。2年の期間が終りに近づいた頃、本国の大学の指導教授から初級ドイツ語の授業と語学ラボラトリー担当主事としての仕事の誘いがきた。それに応えて帰国後、大学院に通いながら、オクラホマ・バプテスト大学 (OBU) で働くようになった。3年後、神学校での勉強を始めることになった。

1983年、神学校卒業後、最初の外国伝道局との面接の2週間後、別の外国伝道局人事担当の方から電話があり、大学の教員、すなわちドイツ語担当の大学教員の求人票に興味がないかという連絡であった。連絡場所へ行くと、J. シェパード先生が書かれ

た西南学院大学からの求人票を見せられた。コピーをもらって、何回も読み返した。まるで私のために書いてあるように感じた。西南学院のことを初めて聞いたわけではなかった。創立者 C.K. ドージャー先生の伝記を読んだことがあったし、OBU で教えたときに西南学院から初めての交換留学生が派遣されていた。語学ラボラトリーにおけるフランス語の自習にその二人の女子学生がよく来ていた。日本への道を進むかどうかを決める前にベイラー大学で教えていた二人の元宣教師 — G. フィルダー先生と J. シェパード先生 — に会いに行った。その後、国際文化学科での審査、信仰告白の提出、人事委員会の審査、健康診断などの人事選考が始まることとなる。

## 1) 辞任した理由

外国伝道局の下で21年間働いて、2003年私は辞任することを決めた。最終的な理由は、南部バプテスト連盟が2000年に採択した信仰宣言「バプテストの信仰とメッセージ (Baptist Faith and Message)」<sup>1</sup>に同意し署名することを拒否したからである。自ら辞任の意思を表明しなくても、署名しないと解雇される状況であった。私にとってその信仰宣言はバプテストの信仰を表明する信仰告白 (confession) ではなく、組織が強制的に指示する信条 (creed) として利用されるように感じられた。それは宣教師として日本に任命されたときに自分の言葉で書いた信仰告白ではなく、バプテストの万人祭司の理念を否定し、連盟が決めたものに署名するように要求されたものだった。次々と重荷を負わされ心理的に追い込まれていた私にとって、この要求は宣教師の辞任を決意する最後の引き金となった。

1988年の定期帰国中に開かれた宣教師のためのオリエンテーションで、海外にいる間に米国で何が起きたかを説明する最新情報の中で、米国南部バプテスト連盟の動きが取り上げられた。大学の時から連盟内の保守的な傾向が強くなったことを知って

---

1 南部バプテスト連盟信仰宣言の変更において、女性の教会と家庭の役割が規定された。「教会」の項目に「男女両方が教会における奉仕のために賜物をいただいているが、牧師職は聖書によって条件づけられているように男性に限定される」という主張がある。また「家族」という項目には「妻たる者は、教会がキリストの主権に喜んで服するように、夫の僕の主権にありがたく服するべきである」という言葉がある。その他聖書に対する見解が微妙に変わった。1963年の信仰宣言に「聖書がそれによって解釈されるべき基準はイエス・キリストである」とあったが、2000年の変更後は「全聖書文書は、ご自身神の啓示の焦点であるキリストへの証言である。」となった。(和訳は日本バプテスト連盟のホームページからの引用。(http://www.bapren.jp/mission2/convention/confession/sengen\_seimei/southern\_b020522southern\_2000.pdf))

いた。バプテスト大学で教えている教授が聖書の解釈や授業の内容のために批判され、解雇されたこともあった。オリエンテーションの時の話によると、それがもっと意図的、組織化された運動になっていた。彼らは「原理主義者」と呼ばれ、連盟の指導権を手に入れようとしていた。その後、帰国する度に何かが変わりつつあると感じた。教会に報告しに行き、女性を講壇に立たせないこと、聖書の話ではなく、証しとスライド、歌に限定して報告することや、教会全体ではなく、子どもや婦人を対象にすることが多くなってきた。

バプテストの伝統は各個教会主義・会衆主義で、連盟への協力献金・協力活動は「ropes of sand (砂の縄)」と呼ばれ、薄弱な絆で結ばれ、バプテストの諸教会間のつながりは自発的な協力であった。連盟が変質してからのつながりは強制と服従によるものとなりつつある。連盟の変質に同意しなかった信者たちが Cooperative Baptist Fellowship (CBF: 協力バプテスト連合) を形成した。ある教会は、SBC だけと手を結び、他の教会は CBF だけと手を結び、他の教会は両方と手を結んでいる教会もある。ある州に二つの連盟が存在し、一つは SBC のみ、別の連盟は両方と関係がある。

連盟の中で起こった変化は外国伝道局に反映されるようになった。理事会で宣教師の正当性が問われ、K. パークス局長は何人かのメンバーに宣教師が受ける人事選考審査を受けさせた。それで混乱はしばらく抑えられたが、局長に対する反対が強くなり、1992年にパークス氏は辞任した。1997年に米国南部バプテスト外国伝道局は国際伝道局 (International Mission Board) と改名し、伝道局の新しい宣教戦略が形になってきた。その宣教理念や方針の一つは、施設と組織 (学校、神学校、病院、連盟、教会など) から離れることであった。もう一つはボランティアや短期間の宣教師を多く派遣することであった。そのうちに日本バプテスト宣教団の「教会」の定義は、建物と牧師の要らないハウス・チャーチと定められた。また伝道の定義は福音を伝え、それに対するその場での決心を要求するものに変わった。

日本に来ようと思ったときに、私は退職するまで日本に根を下ろすキャリア宣教師になる覚悟であった。そのためには、言葉や習慣を学ばなければならない。国際伝道局の趨勢はキャリア宣教師から短期間の宣教師に変化した。キャリア宣教師は時代遅れとも言われるが、それが私の宣教師のイメージであった。

以上諸々述べたが、私に辞任を決意するに至った大筋の経緯である。

## 2) 辞任して変わったこと、変わらないこと

### i) 人とのつながり

宣教師の給料と生活費はバプテスト教会のメンバーの献金からくる。毎週の教会への献金が協力伝道献金の原資となり、その一部が伝道局の活動資金となって、宣教師の活動を支えている。年末の世界祈祷週間には、婦人会を中心<sup>2</sup>として世界で活躍する宣教師の活動を紹介してきた。この祈祷週間の運動は、未だ人々の理解が得られなかった頃に中国での伝道活動に活躍していたロティ・ムーンのアピールの手紙に触発されたアメリカの教会婦人たちの自主的な活動から始まったと聞いている。世界祈祷週間で紹介される色々な国の中に日本や特に西南学院における宣教師の活動もあって、そのお陰でいろいろなところから励ましのお手紙やメールを受け取った。

もう一つ祈りの中で覚えられるのは、宣教師の誕生日である。連盟が出すデポジショナル雑誌<sup>3</sup>や婦人会が発行している雑誌の中で宣教師の誕生日が紹介されている。9.11同時多発テロ事件以前、名前と働いている国が書かれていたが、事件以降は、匿名で載せるケースが増えて、地域しか載せないこととなった。誕生日の頃によく子どもが書いた絵やカード、婦人会からの手紙やカードをいただいた。その中には質問、励ましの言葉や「あなたのために祈っている」という言葉が添えられていた。私の辞任により、国内外で活躍している宣教師のリストから私の名前が外された後も、遠い日本の福岡の地において西南学院で働いている私のために祈り続けている人たちの存在を知り、励まされることがある。

辞任により宣教団の宣教師との交わりが変わった。「ミッション・ミーティング」とか修養会などの集まりに参加しなくなった。このような集会では数日間、英語で話しあったり、讃美したり、一緒に祈ったりすることで、リフレッシュできた。しかしミッション・ミーティングの総会が長くて、辟易させられることもあった。それら会議参加がなくなったが、今は学部教授会と連合教授会への参加がこれに代っている。「ミッション・ファミリー」から「西南ファミリー」になった気分である。

---

2 婦人会は連盟の組織の一部ではなく、補助団体である。組織に従属することを拒んだことで、国際伝道局は「世界祈祷週間」という言わば商標を自分のものにしたことがあった。当然のことながら、婦人会はこの動きを阻止し、独自の活動を維持するために連盟との距離を置き続けている。

3 信徒の信仰生活を支えるための毎日の聖書箇所と短いメッセージを手際よくまとめた小冊子。

## ii) 仕事

辞任してからは、宣教団に関係する仕事が当然なくなった。大学での授業の期間中によく天城山荘か海外に宣教師の集まりがあったり、東京などに委員会があったりした。管理職は特に多くの時間を費やす必要があった。私が携わった管理職の一つに宣教師の日本語学習の管理があった。カリキュラムを作り、大学の授業の合間に日本語を勉強している宣教師の訪問や電話による連絡で、彼らを叱咤激励し、彼らの先生との話し合いをしていた。九州地区宣教師の代表になったときには、後輩とボランティア宣教師の世話、委員会出席などの責任を負わされた。私より長く日本に滞在している宣教師へのアドバイスや宣教団からの指示を再三伝えなければならない時には、困惑と戸惑いを感じた。現在は、その苦しみを負わなくて済む代りに大学の役職としての多忙さと苦しみを味わっている。

以前は教会の代表者として責任と重圧を感じながら、礼拝に出席していた。辞任後はもろもろの教会行事の企画を牧師に任せられることもできるようになり、少し気持ちに余裕が出てきたような気がする。教会の仕事よりも、大学の仕事に重点をおくようになった。必然的に、大学では授業の準備と研究に力を注ぐようになった。以前は、週末を挟んで開催される学会への出席は教会活動のため困難であったが、辞任後は努めて会合に出席したり、進んで発表の機会を逃さないように努めている。大学のハンドベル・クワイアの指揮者としてクリスマス・シーズンに忙殺されるのは、辞任前も辞任後も変わらない。しかし学生との交流、卒業生との交流や演奏を聴いてくれる会衆の笑顔を見ると、疲れも吹っ飛ばすような気がする。



チャペルキャンドルサービスでのシャフナー先生

もう一つの変ったことは定期帰国のことである。以前は、定期帰国の際に日本で  
の伝道活動について報告や講演をして回る決まりがあった。現在は、帰国時に家族と  
過ごしたり、図書館で資料収集するのが習慣となっている。

### iii) 生活

辞任するまでに、給料は米国バプテスト国際伝道局からきていた。医療保険も米国  
のものであった。大学から手当てをもらったら、領収証をつけて、支出明細を宣教団  
に報告した。大学の手当てが残ったら、残額を宣教団に返還することになっていたか  
らである。確定申告の時期には、西南学院からもらった手当の申告を自分で行わなけ  
ればならなかったが、現在は給与として受け取っているので西南学院の人事課に任せ  
きりである。一方米国の税金申告の場合、以前は伝道局の経理課が計算してくれてい  
たが、現在は自分でそれを処理しないといけなくなった。

住むところも変わった。辞任してからすぐではなかったが、宣教団所有の住宅を出  
ないといけなくなった。その住宅は、現在大学の新しい男子寮を建設している場所に  
あった。キャンパスに近く、アメリカ式建築であり、友人をホーム・パーティーに呼ぶ  
のにも便利などころであった。そこでは卒業パーティ、新入生歓迎バーベキュー、コ  
ンサートの打ち上げ、入試中にキャンパスに入れない時のハンドベル演奏旅行練習、  
ゼミのコンパ、教会の修養会などが行われ、今では懐かしい思い出である。今住んで  
いるアパートでもホーム・パーティーをするが、レストランで集まることが多くなった。

辞任後、精神的に開放感が与えられ、南部バプテスト連盟の動きから距離ができた。  
連盟の今の動きが私との直接的な関係がないので、対立から抜け出した感じがする。以  
前、対立の直中に置かれて、他人の動きに右往左往している感があった。原理主義者  
の要求はだんだんエスカレートしていく傾向にある。信仰告白に署名することに止ま  
らず、今の宣教師に対する要求はバプテスマ（洗礼）と異言に関するものである。私  
はそのような状況から距離をおいて毎日を過ごせることを神に感謝したい。仕事に対  
する葛藤からの解放もある。どの仕事を優先させるべきか——宣教団の仕事か大学の  
仕事か教会の仕事か——を決定することで心の葛藤があった。しかし、それも過去の  
ものとなった。

日本に来た当時と現在を比較すると、私の心の在り方は変わらない。キリスト者とし  
てのアイデンティティ、または教育者としてのアイデンティティは変わらない。学生  
と共に学び、教会員と共に信仰を育て、自分の信仰を全うする、その心の在り方に  
変化はない。ガーナでジャーニーマンとして働いた2年間には、聖書通信教育や宣教  
師の子どもの教育支援を行った。その時もアメリカのオクラホマ・バプテスト大学の

教員やテキサスにたどり着いた難民に対する実用英語の教師として働いた時も心の有りようは今と少しも変わっていない。神様によって、召されているという信仰は変わらない。最初は宣教団の下で西南学院において働き、その後西南学院の下で働くようになったが、いずれにしてもキリストの下で働いていることに変わりはない。

この原稿執筆は、辞任後5年間が経ってその過程を振り返り、気持ちを整理するいい機会となった。これまでの23年の歩みの中に神様の導きを感じている。西南学院で働き続ける機会が与えられ、感謝である。キリストに忠実になれるように退職するまで働き続けたいと願っている。

最後に、私の支えとなった一つの聖書の個所を引用してこの小文を閉じることにしたい。Amplified Bible の聖句とそれを和訳して、引用する。

“Roll your works upon the Lord [commit and trust them wholly to Him ; He will cause your thoughts to become agreeable to His will, and] so shall your plans be established and succeed.” Proverbs 16 : 3<sup>4</sup>

「あなたの行いを主の意に沿うように心を砕きなさい。完全に主を信頼し、それらを主にゆだねなさい。そうすれば、主はあなたの思いを主の御旨に叶うようにしてください。そのようにして、あなたの計画は定着し、成功する。」箴言16章3節

---

4 Scripture quotations taken from the Amplified® Bible, Copyright© 1954, 1958, 1962, 1964, 1965, 1987 by The Lockman Foundation. Used by permission.